

「毛利兵橋重政」と「吉安」について

東京都立法
会議員 御手洗 一而

まえがき

① 小説を書いておられますと、年代を違えますので、學者の研究者に見えまい。隆儀の功名が後つかかります。今回もその一つで、松郷の擬定、日田入りの時期、正室水常夫人と石川康長との關係等、整理すべき題材が賑がっておられます。一つの整理して發表したいと思つて。

② 同封の原稿は、詳細に論文すべきと思つてまいすが、毛利家の作爲(吉安と兵橋重政にならざるゑること)と累々の才気が進まず、かといつて、このまま放置すべき問題ではないので、中途半端を書き方をなすまいと左が、當り子障らすとめまされた。

③ 「佐伯市史」一五六頁中心文書の毛利兵橋、次伯の目付毛利重俊守(市史は重前守勝永)は、すべて兵橋重政のことで吉安ではありません。何しろ果下の諸書、「二重小藩物語」をはじめ、ことごとく(一)付きて吉安の文字を入れ誤つておられますが、これも毛利系図によることで、一々書名を挙げるゝ上様でしなから止めました。

これは、御市史の完全を誤りですから、はばからず書きましました。

一、はじめに

今年から一つの視点をもち、近世史を勉強しようと思つた。庄屋についての研究である。永年の課題であつたが、専門書のない庄屋の研究は、全く手探りから始めねばならない。

佐伯地方の庄屋は、毛利高政の入部からその存在がはつきりしてくる。そして、佐伯氏遠征の部将たち、二君に見えずとして帰農し、地域の名となり、多くは屋敷となつて毛利氏の支配下に組み入れられる。この変革の關係を調査するには、先づ支配者の政策を調べねばならない。となると、それ以前に、藩祖高政の人となりを知る必要があつた。

それは、高政公の伝記を書き横道に探してしまつた。それはそれで勉強のしがいのある題材であつたが、いざ始めてみると、悲歎苦悶の連続である。三三章ごとに新事実が現れる始末で、これには目と唇を怪つた。事実かどうかが別問題にして、どうしても見逃せない事象は、会員の御批正を仰がねばならぬと思つた。

二、高政公の家族

高政公の出自については、すでに書きつくされておるのでここではとりあげない。子供については、鶴蔭政史に次の如く明記されている。

一、公四男二女有り長男曰く高成、次曰く高明、次曰く女子(延享五年三月二十四日薨す忠興院と謚す)淺路守松平重長に嫁す、(録出千石と出雲庄屋に食む) 次は女子、名曰水子、益田監物(家長吉波の子)の妻。次は權六(十月薨す其

年月不詳、全葉宗志と證す。次は萬吉、權六以下五人、世子封を讓ひ是を孤孫公と爲す」

兄弟についてはどうであるか。同じく歴史の、慶長十七年六月十九日の項に、

「箕川隊長を召して二十人籠を給す。……公の妹安子と繋ると以て……」
とあり、公に妹のあったことが知られる。

また、奥母弟の九郎左衛門尉吉安については固知の通りであるが、温故知新録に詳述されているのでこゝでは省略する。

毛利家に現存する系圖の詳述は知らないが、市史による毛利家略系には、高政・吉安二人の兄弟を並記している。そして、森吉安の右肩に「妹毛利兵衛重政」、左肩に、「初兵衛又權六、後九郎左衛門尉」と肩書が付けられている。

果下の端本はこれに依拠して、重政と吉安を同一人物視しているが、高政公の伝記を書く上で、これら兄弟を幼兒から年代順に追ってみると、非常に疑問点が多い。重政と、これを称する吉安は果して同一人物か、別人か。本題はそれを少し整理してみたい。

二、兵衛重政と吉安

高政兄弟が文献上に見られるのは、高松城入質の一件が初見である。

この時の記事は、徳川実記・大獄院実記の寛永五年十一月の項にあり、市史にも記載されている。

「天正十年六月、羽柴と毛利輝元と和睦のとき、高政は弟兵衛(吉安)と共に、毛利へ入質の奉りけるに……云々」

とあり、市史は毛利家の系圖から(一)で吉安の位を加えている。実記にはない。

私が高政公の調査を始めたのは数年前のことであるが、この時点で「兵衛吉安」と何の疑念もたず、吉安について、温故知新録の記事と、鶴藩歴史の「二代高政公」の項に

「九郎左衛門尉と稱し、養賢公の弟なり。幕府の麾下となり、堅田・床本二千石を食す。寛永十七年四月、江戸に卒す。」
とあり、簡單にその経歴と頭に入れておいた。

しかし、高政公の伝記を書くとなると、吉安の年令を知る必要があった。

徳川幕府は、五百石以上の武士について、その系譜を上申させ義務づけていた。それが寛永・寶政の系圖集である。

この時私は、これらの系圖集や武家事紀から編集した「戦國人名辞典」(吉川弘文館)が、何かの役に立つだろうと求めていたことを思い出した。

毛利吉安については、寛政譜を引用してまとめていた。毛利吉安(一五七四—一六四〇)(權六、九郎左衛門)

高次の三男、初は森氏、秀吉に仕う。天正十五年三月十五日兄高政領の内二千石を分知する。寛永十七年四月朔日死す。六十八。(寛政譜)

私日六十八歳から逆算して、吉安が天正二年の生年であることと知り得たが、「高次の三男」と見て、心おやへと思つた。そして高松城攻略の時の年令を調べると、吉安九歳の時になった。九歳の吉安が中国経略に従軍するはずもなく、松郷から入質のため連れ出される余裕もなく、吉安の入質一件と疑問は思いながらそのままにし

ておいた。

それから二、三年後のことである。

秀吉の四回征伐の整飾を調べながら、「日本ノ合戦・六・重臣秀吉」(新人物往来社)と読んでみると、偶然「森秀吉」の文字が眼につけて小躍りした。

秀吉が、伊藤掃部助に宛てて指示した手紙の中、第四條に

一、其方争、水津城後巻諸手中付け候間、備前赤居陣の城に可之、越後無き様は所要に候、委御森秀吉中とあり。

兵吉と兵橋は同音で、これこそ吉安かと簡単に考えたが、この時天正十二年且、吉安十一歳で、秀吉の軍略に關する使者を勤めるには齡が若すぎ、不審に思ひながらも解明の方法がなかった。

今年になつてからである。

いよいよ高政公伝記の執筆を思ひ立ち、高政と交換に毛利方から人質になつた、毛利秀吉を調べようと、先づ「職人典」を調べてみると、「モ」の項に「毛利重政」とあるではないか。兵橋の文字ばかりに夢中になつていた私は、驚きながらとうかつた自分と恥じた。

先ずは全文を録分する。

毛利重政(一五五二—一五九七) 兵橋 従五位下重後守 高次の次男、秀吉馬廻、また金切裂指物使者(式)

家事記)文祿二年豊後木付(将築)城主(助井日記) 慶長二年の再役には先手目付六人の一人(武家事記)。

同年五月六日朝鮮で瘧死、四十七。(朝鮮通志)寛永

(系圖伝)

毛利兵橋重政は実在の人物であつたが、執着は変に思われたいに違ひない。筆者は、重政を高次の次男、吉安の三男としているが、一五五一年、天文二十年生まれの重政は、高政より九歳年上である。私は一見この錯誤を編集を疑つたが、活字の行間に、幾多の問題が含まれてゐることに気がついて歡喜したものである。次にその問題点を整理してみたい。

(一) 信憑性の高い諸文献からの引用は、重政と吉安は完全な別人であることを判然とさせ、高松城人質の一件や四回への使者も、兵吉と重政とすれば、年齢的には過不足ないことがわかつた。

(二) 重政は、高次の長子であるかもしれない、とすると、高政の兄となり、隠史にいう、「初め豊國公胤なる時瀬尾小太郎と親善なり、その女を子へ公と生む云」が浮きぼりにされ、高政の秀吉庶子説が再浮上し、秀吉の権力の前に、高政を嫡子としたことも考へられるが、高政の出生に關しては、市史の説明が妥当な線である。

(三) 三番目、物鞍り作製上、私の推察した設定である。重政の子兵橋重次について、母典では「豊後から城知移勤後、慶長二年阿波板東郡河崎村、三保村一千八十余石を継ぐ」(埴賀家譜、實政譜)とあり、一様河波國へ移動してゐるが、子重次の名前が知れないかという推察である。高次の兄政次とつながる。

以下、私の推察を展開してみる。

高政の父高次は、元政次の死後、森家を相続している。高次は元政次の遺児重政を後見し、おが子のようには育てた。重政の政は父政次の一字をとり、その子重次は、父重政の重と祖父政次の次をおわせ重次とし、政次も重政も重次とつながる系譜に見えてきた。

そして重政が朝鮮で病死し、この年高次も夭折を全うするが、残された重次、重政一族は、何故か高政に頼ることをはばかっている。当時高政は隈城にあり、吳母弟の吉安に分知し、重政は後述する日出城に城代を勤めていたが、のちに一族は何故か移動する。

この間の事情は、私なりに重政の妻は蜂須賀家に縁がある、むしろ蜂須賀家へ出でるとはらんでいゝ。この事は、秀吉の徴禄の時、高次と蜂須賀小六は、墨股築城頃からの同胞であり、重政の縁組みに最も適であった。重政亡き後と、一族は遺児重次を連れて、実家の蜂須賀家へ帰ったのであるまいか。蜂須賀家の家譜がそれを証明しているように見えてならない。

ここで簡単に兵橋重政の略歴を整理すると、高政同様少年期から青年期にかけて秀吉の近習として仕え、高松城の人質は、この高政、重政兄弟(抄記)である。兄弟は四回九州征伐の功勞により、高政は日田隈城主の大名にひとり立てられ、重政は、奉行前田玄以の預かる日出城(詳説には大分城とある)に城代として入り、大名格となる。朝鮮の役では兄弟とも目付として活躍するが、重政は現地で病死し、秀吉政権交替後一族は河波に帰り、蜂須賀家に仕えている。その間高政は佐伯に移封し、吉安は前記の通り二千石を分知され、のちに江戸に出て、寛永十七年に没している。

四、おわりに

以上整理してみると、朝鮮の役で先手衆目付役を仰せつかった六人衆の一人、毛利豊後守は兵橋重政のことであり、中川文喜の毛利橋本重政のことであり、吉安が目付に抜擢された形跡はない。

吉安は高政の異母弟とあり、重政が高次の実子、つまり高政の妻の兄弟が異母兄弟が、あるいは元政次の子をおが子としたか確証はないが、何れにしても、権六九郎左衛門吉安を吉安と、兵橋と呼ぶ豊後守重政とは混同してはならない。別人であると言つてはばからないし、一考を要する。

県下の諸本に見る重政と吉安の同一人物視は、市史にいう毛利家略系ノ肩書に起因していると思われる。

重政と吉安の疑問は、私なりに治家では判然としない。高次、高政公の物語りを書く上で矛盾から、丹念に年代を追って拾いあげたものである。

私には藩政史など余り興味はないが、高政公の調査から、近世史の勉強の糸口を探つてみると、歴史の関連性で啞然とすることがある。今回の調査で様々な新事実が判明したが、すべて後述の功名ともいふべきものである。

例えば、七久保長安事件に連座した石川康長は、佐伯に預けられて生涯を終ったが、毛利氏へ預けたのは単なる出来事ではなかった。徳川政権の温情とも陰険ともいわれる政策が裏にひそんでいる。高政公と正室木曾夫人と石川一族にたががる人縁の因縁がある。この因縁はも次の機会に整理してみたいと思つている。

なお、兵橋重政と吉安のこの稿は、小論文にすべき題材であったが、おえて肩のこらないうれしい随想風に改めた。諸賢のご批評を仰ぎたい。

(終)